

2

毛筆指導の中での硬筆の取り扱い

硬筆指導の工夫 (高学年編)

書写の時間

元静岡市立服織小学校校長

松本健作



1951年静岡県生まれ。静岡県書写道振興会副理事長、前静岡県書写道教育研究会長。県内の小・中学校や書道教室で講師を務める。光村図書小学校「書写」教科書編集委員。

今回は、中学年を例に、「毛筆指導を硬筆に生かす工夫」についてお伝えしました。今回は、高学年を例に、硬筆、毛筆を関連させた授業の流れをご紹介します。

はじめに

小学校高学年の書写は、配当される年間三十単位時間程度の時数のほとんどを、毛筆指導に充てるが多くなっているようです。また、毛筆指導は、硬筆書写の基礎を養うためである、とはいうものの、硬筆への生かし方、日常の手書き文字との関連が授業で示されることはあまりありません。

そんな学校現場の状況もあり、前回から硬筆指導を取り上げているわけですが、硬筆だけを指導するよりは、毛筆との関連で硬筆を扱う方が理解しやすいという

こともあり、毛筆指導の中での硬筆の取り扱いについて述べたいと思います。

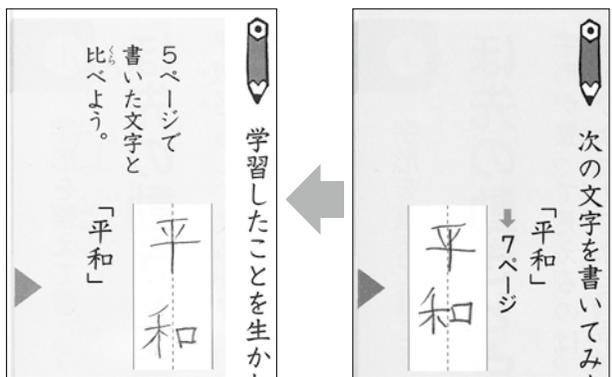
教科書を活用して、
児童の書き文字の変容
を確かめる工夫

『書写』教科書を見てみると、日常の書き文字である硬筆の文字が、どのように上達していくか、児童自身が確かめられる工夫が見られます。例えば、五・六年の5ページでは、学年スタート時点の自分の文字を、硬筆で試し書きする欄が設けられています。五年生は、「平和」よ

もぎ」「道」を、六年生は、「湖」「あけびゆらす秋風」を、筆記具の持ち方に気をつけて書きます。この時点では、文字の構成等に関する学習目標は示されていないので、児童が日常記す書き文字が教科書に残るかたちとなります(※1)。

その後、どちらの学年でも、毛筆を使っ

てこれらの文字を学習します。例えば、五年の「平和」「よもぎ」は、6〜9ページの「字形を整えて書こう(ほ先の動きと点画のつながり)」の中で理解を深めます。それぞれの学習ページには、最後に硬筆でまとめ書きをする欄が設けられており、日常使用する硬筆にその学びが生かせるようになっていきます(※2)。



▲※1 学年スタート時点に書いた文字(『書写』5年p5)

▲※2 穂先の動きと点画のつながりに気をつけて書いた文字(『書写』5年p7)

前回の「毛筆指導を硬筆に生かす工夫」でも述べたように、硬筆と毛筆を関連させて学習することで、硬毛両方を効率的に学ぶことができるのです。

四十五分の授業の中で、
成果を確かめる工夫

各単元での学習による文字の変化・学習の効果をj知ること、前述のとおりで

す。これに対し、四十五分という一時間の授業の中で、どのように変わったのかを知るためには、何らかの指導の工夫が必要です。自分の書き文字が、部分的にでも上のレベルに達した(上達した)と感じ取れる授業を提供できたら、児童の喜びもひとしおでしょう。ここでは、児童も取り組みやすく、硬毛関連指導が簡単にできるワークシートを紹介します。

1 用紙に対する文字の大きさを学ぶ
— 「飛行」(五年21〜23ページ) —
ここで使用するワークシートは、一枚の紙の中で硬筆から毛筆、毛筆から硬筆へと指導場面を素早く切り替えることができるものです。まず、毛筆で試し書き

をするのではなく、三種類の大きさのま

すにつり合った「飛行」を鉛筆で書くこと

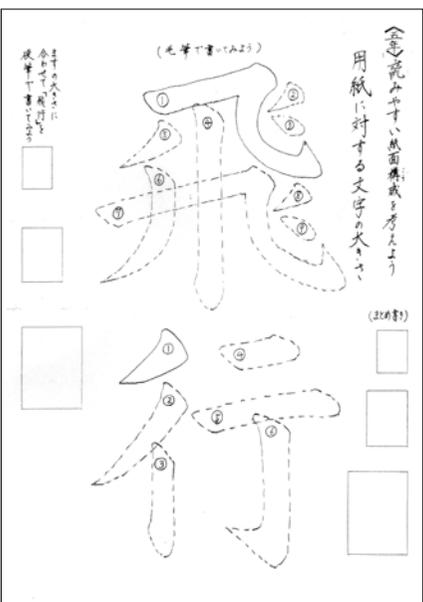
から始めます。ワークシート①(※3)の左側の三種類のま

すの大きさに合わせて、「飛行」を三回書き、次に、毛筆でかご文字の「飛行」をなぞります(※4)。

筆順・外形・上下左右の余白に気をつけながら書くことで、用紙に対する文字の大きさを感覚的につかむことができます。

ワークシートを使用しないで、いきなり半紙に試し書きをjすると、「飛」は画数が多いこともあり、用紙の半分以上を占める形で書いてしまい、「行」が書けなくなってしまうというケースがよく見られます。

読みやすさは、用紙に対する文字の大



▲※3 ワークシート①



▲※4 三種類のま

ここまで、硬筆指導に関する細かな工夫を紹介しましたが、時には、もっと自由を書く時間も設けたいものです。

「まげまな表現を 楽しむ」

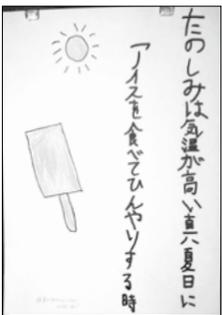


▲※6 児童どうして評価し合っている。

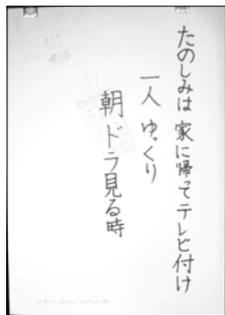
▲※7 「中心に気をつける」という学習目標を踏まえたうえで、友達の書きぞめを評価している。

学校生活や家庭生活の中には、多くの種類の筆記具が存在します。紙面に対して大きく、太く、美しく書くには毛筆が適していますが、はがきサイズくらいの紙に俳句、短歌、詩を書いて掲示するときには、児童作例A～C(※8～10)に見られるようなサインペンやフェルトペンが書きやすく、扱いも簡単です。しかし、毛筆で書いた文字とは表現がかなり異なります。作例A(※8)のような、はがきサイズの中に大きく書かれた「紅葉」は、正方形の外形にしっかりおさまるような形で書かれ、少しデザイン化された字形になっています。既習事項の「へんとつくり」の関係や「画の長さ」についての学習成果は見受けられません。しかし、丁寧に運筆している様子はうかがえます。作例B(※9)は、「止め、はね、払い」をしっかりと表現していますが、作例C(※10)は、筆記具の関係もあるのか、払いの表現が曖昧で、ゴシック体を思わせる文字になっています。

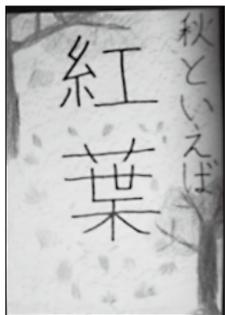
個々の書き文字の表現方法は多岐にわたっています。しかし、読みやすいこと、丁寧に書いていること、誤字がないこと、紙面に対して構成が適切であること、見る相手に対して意識があること、これらが配慮されているならば、時にはこのよ



▲※10 児童作例C
ゴシック体のように
書いている。



▲※9 児童作例B
止め、はね、払いを
しっかり書いている。



▲※8 児童作例A
ます目いっぱい
書いている。

うなバラエティーに富んだ表現もおもしろいですね。児童の書き文字への関心を高める手立ても見えてくるかもしれません。

今回は、毛筆指導の中での硬筆の取り扱いについて、高学年の教科書や、自作ワークシートを使って紹介してみました。児童が、もっと書きたい、もっと知りたいたいと思うような書写のワークシート、資料作りの工夫をしてみたいものです。

大きさにより異なってきます。鉛筆で何回も書いて感覚を磨いたり、読みやすい大きさの文字をなぞるなどして、数多く書いたりすることで、読みやすい紙面構成を身につけることができます。

ワークシート①のかご文字を毛筆でなぞった後、紙面に対するつり合いの感覚が残っている間に、半紙に毛筆でさらに二枚「飛行」と書きます。自分なりに納得のいくもの、グループの友達が評価してくれたものなどの基準でいずれかを選び、鉛筆で、学年・名前を書きます。

最後に、まとめ書きとしてワークシート①の右側の三種類の大きさのますの中に「飛行」と鉛筆で三回書きます。授業の初めに書いた文字とまとめ書きの文字を一枚の紙(ワークシート①)の中で比較し、評価することによって、成果がひと目で分かれれば、学習意欲、文字意識の高揚につながります。

2 目標の焦点化

―書きぞめ「希望」―

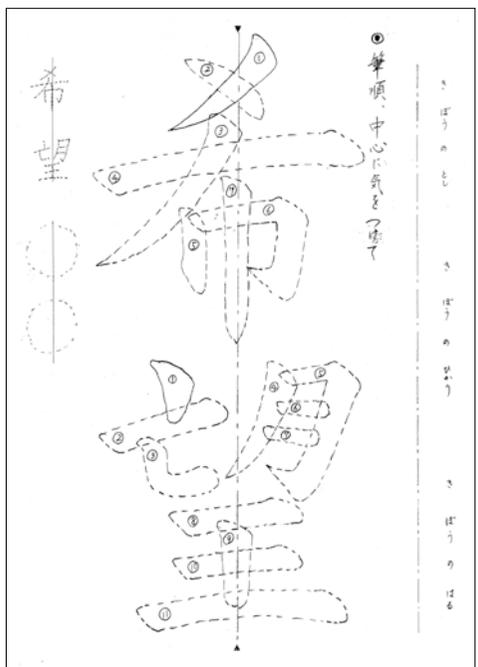
(五年26～29ページ)―

この課題には、書くときに気をつけることが五項目示されていますが、クラスの実態に合わせて焦点化させることが大切です。ここでは主に、筆順と配列(文

字や行の中心)に気をつけて書くことを目標にしたワークシート②(※5)を使用して、硬筆→毛筆→硬筆の授業の流れをつくります。毛筆でのまとめ書きは、二枚のうち、より目標にかなったものに鉛筆で学年・名前を書きます。

このとき教師は、「生まれてから今までで、いちばん整った美しい自分の名前を書きましょう」と投げかけ、児童に軽い緊張感をもたせます。児童が普段自分の名前を書く場面はテスト用紙が多く、急ぐため、早くいい加減に書いてしまうことがほとんどです。それを克服する絶好の時間です。

毛筆で課題文字を大きく書き、文字の構成・筆順などを理解したところでワークシート②に戻ります。そして「希望」の筆順と行の中心に気をつけながら「希望の年」(希望の光)「希望の春」を鉛筆でまとめ書きします。四年の筆順と字形(課題文字「左右」)で学んだように、「希



▲※5 ワークシート②

の筆順を間違えていると、最終七画目の縦画を中心線より右側に書いてしまう傾向が強いので、常に「筆順に気をつけよう」「筆順は大丈夫かな」と呼びかけ続けます。

書き終えたら隣の児童と交換して、相互校正をする時間を作ります(※6・7)。学習の目標がはっきりしているので、児童どうして文字表現について語り合い、児童の尺度で評価をし合うことも可能です。このとき、「相手の書き文字のよいところを二つ以上、そして、直したいところを一つ見つけましょう」と投げかけ、まとめの時間としながら、次の授業への課題作りになります。